

【あかいはな】

昨夜から降り続いていた雨が、夕方になって突然やんだので、隣のお姉さんの処にお見舞いに行きました。

母親に渡された、蒸（ふ）かし芋を持って。

お姉さんは奥の部屋で、横になっていました。

「だいじょぶかのう。つらくないかのう」

ぼくは声をかけましたが、恥ずかしくて蒸かし芋は渡せない。

もじもじしていると、

「金ちゃん、お芋のにおいがするわねえ」

とお姉さんがつぶやくので、ようやく、

「つまらんもんで、すまんのう」

蒸かし芋を差し出しました。

「あら、やっぱり。お芋はわたしの大好物なんよ。金ちゃんったら、知っていたのねえ」

お姉さんが微笑むので、

「しらいでか」

と嘘をつきました。

「おねえさん、しにはすまいな」

ぼくがおもい余って聞くと、

「ええ、死んだりするものですか」

お姉さんはまた微笑む。

いつもの白い顔が、ますます白くなっている。

黒い髪のが、何本か額に貼り付いている。

汗をかいているのだ。

「いしゃを、よぶかのう」

「お医者さんはいいの。自分でよくわかっているから」

お姉さんは、どことなく、この世の人でない雰囲気、漂わせています。

「おねえさん、いつなおるんかのう」

ぼくがおもい余って聞くと、

「胸のなかにね、赤い花が咲いているんよ。その花が散ったらね、治るのよ」

そうか。

お姉さんの敵は、赤い花か。

それからのぼくは、道でも野原でも、人の家の庭でも、赤い花を見ると、雫（もし）ってしまう癖が、ついてしまったのです。